

## 修士体験記

人文学プログラム

西川 彰治

私は診療放射線技師として働きながら、山下清のちぎり絵の「花火」の不思議な魅力を解明したいと人文学修士課程に入学しました。立体感は両眼視差によると見当をつけて花火作品を被験者に交叉視やアナグリフ法（左右が赤と青の眼鏡を使用）で見た際の違いを調査・検証しましたが、魚住孝至教授から江戸時代の眼鏡絵の立体感との類似や山下の知的障害や放浪後に集中して絵を制作した意味なども考察するように指導された。2年間は演習で発表する度に質問・助言があり、研究レポートⅠ、Ⅱ、Ⅲで半年毎に章の構成を修正する内に論文の骨格と肉付けが出来ていったが、論の繋がりが甘いので、一年間延長することにした。Zoom 演習となったが、教授の助言で先行研究を見直し、伝統画法と西洋画の線遠近法を融合させた江戸後期の浮絵の眼差しとの類似を発見し、サヴァン・アスペルガー症候群に顕著な共感覚と記憶などの新知見も得て修士論文をまとめることが出来た。生誕 100 年を迎える山下清作品を昭和の風土記的文化財と捉え、今後英文で世界に発信する夢も持つようになった。期待以上に意味深い大学院生活に深く感謝しています。

## 二つのゼミ体験

人文学プログラム

吉田 忠夫

大学院入学の契機は、多忙であった金融機関を定年で終え、一年程心身を癒していましたが、生来のセツカチな性格から、リタイア後に放送大学に入学すると共に、書道を習い始めました。書は幼い頃の一時に習字に通っていた思い出があり、老後を迎え静かに筆をとるのも良いかなと思い、再び初心に戻りスタートしました。その書道の題材に「良寛」の詩歌を度々目にする様になり、地元越後の良寛をもっと知りたいと思っていたところ、放送大学(人間と文化コース)で、国文、仏教、芸術、歴史等幅広い授業を受ける機会がありました。そのなかで西行、兼好、長明の系統にある良寛について、人文学の見地から研究してみたいと思い、幸いその機会を得ました。論文の指導担当教授には、分かり易い講義で全国のご活躍されておられる島内裕子先生を希望させて頂きました。しかし、「良寛研究」は先人から今日に到るまで余りにも多くの文献で溢れており、研究の独自性をいかに盛り込んで行くかを問われました。そこで、良寛が遺した芸術作品に注目し、その作品のおおらかで、普遍的魅力はいかに形成されたのか、その根源となる彼の隠遁的暮らしのなかでいかなる「豊かさ」を享受し、それを「支えたものは何か」の視点から取り組むこととしました。更に今日、不透明・格差拡大の社会環境のなかで「豊かさ」を感じられない多くの私達にとって、「真の豊かさ」を問い直すヒントを良寛の生き様から提起するものです。

論文作成にあたっては、初年度は東京茗荷谷でゼミが開講され、全国から集まった男女8人のメンバーと共に島内先生から和やかで、明瞭なご指導を受けました。また、研究課題は各々異なっても、他の人の研究内容を拝聴することは大変参考になりました。夕方にゼミが終わると仲間で近くの居酒屋に座し、年代を超えて様々の話で盛り上がり意気投合。しかし、二年度目はコロナ禍で東京でのゼミはZOOMに切り替わり、飲み会も中断し心残りとなりました。リモート会議については、過去の職場でテレビ会議の経験がありましたが、自宅では初めての体験となりました。ZOOMは、あの和やかさと表情を肌で感ずる面談ゼミに比べると、私の場合は不慣れでもあり疲労感が残りました。しかし、この二つの形態のゼミは貴重な体験となりました。その中でも島内先生からは、変わることはないきめ細やかなご指導を頂き、なんとか論文を仕上げる事が出来ました。本研究がこれからの生涯学習の指針となったことに深く感謝いたします。